

当事者目線の障がい福祉実現宣言に至る経過・背景について

1 宣言の趣旨

- 平成28年7月26日、県立障害者支援施設である津久井やまゆり園において、19名の生命が奪われる大変痛ましい事件が発生した。
- この事件からの再生に向け、県では、「津久井やまゆり園再生基本構想」を策定し、利用者の意思決定支援や、津久井やまゆり園、芹が谷やまゆり園の2つの園の整備に取り組んできたところである。
- しかし、その間、かつての津久井やまゆり園の利用者支援に関し、不適切な支援が行われてきたと指摘する情報が県に寄せられた。
- 県では、同園の利用者支援の内容について検証を進めてきたが、安全面を優先した、長時間の居室施設など、虐待の疑いの強い身体拘束が行われてきたことが明らかになった。
- また、これらは他の県立施設でも同様の課題であることがわかり、本来、指導すべき県の認識も不足していたことが明らかになった。
- 一方で、以前津久井やまゆり園で車いすに長時間身体拘束され、暗い表情だった方が、民間の施設での生活により、生き生きとした表情になって活動するようになり、あらためて施設の支援のあり方が、一人ひとりの利用者にとってどれほど重要な意味を持つのかを認識した。
- 「安全面を優先した」といった理由があったとしても、閉じ込められたり、縛られたりすることがどれほどの苦痛を伴うことなのか、その利用者本人の目線に立って、支援のあり方を徹底して見直すことが不可欠と考えた。
- また、全国に先駆け、津久井やまゆり園の利用者の意思決定支援に取り組む中で、支援を通じ、利用者の人柄などについて理解を深め、「まず利用者中心に考える」ようになるなど、支援者の意識に変化が見られた。
- これまで、障害者支援施設での支援は、「利用者のために」という、利用者の安全を優先した支援者（管理者）の目線で、長時間の身体拘束などが行われてきた。
- しかし、これからの障がい福祉は、本人の望みや願いを第一に考え、本人の可能性を最大限引き出す、利用者の目線、つまり、「障がい当事者の目線」に立った支援を行うべきとの考えに至り、これを当事者の皆さんはもとより、県民の皆さんに広く伝えたいと考えた。
- おりしも、今年は、再生された津久井やまゆり園と芹が谷やまゆり園の二つの施設が完成するときであり、このタイミングを新しい障がい福祉のスタートと位

置付け、本日の開所式が、当事者目線についての考えを発信する場として相応しいと考えた。

- このため、津久井やまゆり園の開所以降、改めて「当事者目線」とは、どういったことなのかを、障がい当事者の方との対話や現場視察を重ねて考えてきた。
- 当事者との対話からは、「わたしたちの声や思いをよく聞いてほしい。」「拘束された人の気持ちを聞いてほしい。」「代弁はもういない。」という話を伺い、一人ひとりの障がい当事者の心の声に耳を傾け実践する福祉が重要であると考えた。
- また、「欲しい居場所には仲間、友達が必要。」と将来展望検討委員会の委員である当事者の方が発言された。地域とは何か。仲間がいる、友達がいる、そうしたつながりのある暮らしが地域であり、こうした当事者の望む暮らしと一緒に考えることを忘れてはいけないと認識した。
- さらに、こうした福祉の実践は、当事者の皆さんの幸せとともに、支援者、周りの仲間にとっても喜びにつながり、双方向の支援こそが、「当事者目線」であることに気づいた。
- そして、この宣言は、新しい津久井やまゆり園と芹が谷やまゆり園、この二つの施設が完成して、一つの区切りになる、この時に、これまでの「支援者目線」という障がい福祉のあり方を、新しい「当事者目線の障がい福祉」に大転換し、「ともに生きる社会」を実現するべく全力を尽くすことを誓うものである。

2 誰に発信するのか

この宣言は、「当事者目線の障がい福祉」に大転換を図るという、県の決意を障がい当事者、ひいては県民の皆様に向けて、発信するものである。

宣言後も、障がい当事者や関係団体の方との意見交換などを続けながら、「当事者目線の障がい福祉」に関する理解や浸透を図っていく。

3 その他

参考資料 当事者目線の障がい福祉実現宣言に至るまでの経過

当事者目線の障がい福祉実現宣言に至るまでの経過

平成 28 年	7 月 26 日	津久井やまゆり園事件が発生	
	10 月 14 日	「ともに生きる社会かながわ憲章」の策定	
平成 29 年	10 月	「津久井やまゆり園再生基本構想」の策定	
令和 2 年	1 月	「津久井やまゆり園利用者支援検証委員会」設置	
	7 月	「障害者支援施設における利用者目線の支援推進検討部会」(以下「検討部会」)設置	※障がい当事者 1 名参加
令和 3 年	3 月	検討部会報告	
	7 月	「当事者目線の障がい福祉に係る将来展望検討委員会」設置	※ 障がい当事者 3 名が参加
	7 月 4 日	津久井やまゆり園開所式	
	7 月 26 日	知事による現場視察①	※ 愛名やまゆり園施設内の視察後、職員と意見交換を実施。
	8 月 2 日	知事と障がい当事者との対話①	※ ピープルファースト横浜障がい当事者 8 人と「地域の中でふれあい、自分らしく生きていくためには」をテーマに対話(当事者の言葉)
		○ 「拘束された人の気持ちを聞いてみたいです。」	
		○ 「私たちは何を虐待と思うのか聞いてください。」	
		○ 「一生懸命しゃべっているのに伝わらないときショックでした。そのような場合、聞き直して欲しかったです。」	
	10 月 5 日	知事による現場視察②	※ 中井やまゆり園(記者会見時の知事コメント一部抜粋)
		○ どんな施設であろうと「通過型の施設」といったことは、共通理解になっているが、今のままだとすれば、「終の棲家」にならざるを得ないということを感じた。	
		○ 安全のために閉じ込めておく、感覚が過敏であるからこそ、そうせざるを得ないといった支援。我々が目指しているのは、当事者目線の支援。そして、施設を一時的な場として、地域に出て行かれるような力をつけていくためのそういった施設にしていく。これが、我々の目標だといったことを今日は強く感じた。	
	10 月 18 日	知事と障がい当事者との対話②	※ アール・ド・ヴィーヴル(当事者の発言)
		○ (自分の絵を語り、皆さんに聞いてもらったギャラリートークは)「最高でした。」	
		○ (自分の思いを聞かれることは)「嬉しい。」	

令和3年 10月20日 「当事者目線の障がい福祉に係る将来展望検討委員会」
中間報告

(当事者委員の発言)

- 「地域で暮らすには、会話をすごく大事にしています。そうすると、だんだんと、いのち輝くようになる。」
- 「仲間たちの表情をよく見てください。仲間たちの声や思いをよく聞いてほしい。もっと仲間の意見を聞いてください。」
- 「代弁はもういらないです。」
- 「自分が欲しいのは、居場所です。自分の欲しい居場所には友達が必要です。」
- 「居場所を作るチャンスをください。友達を作るチャンスをください。施設で暮らす仲間にも居場所と友達が必要です。職員は仲間と考えればいいです。」
- 「憲章は難しい。黒岩知事は、『いのち輝く』という言葉を使って、分かりやすく答えてくれた。」
- 「僕のやりたいことを押してくれる人、気持ちを分かってくれる人がいれば、僕はいのちが輝きます。」
- 「職員は仲間と本気で関わってもらいたいです。職員が諦めたら仲間の人生は終わってしまいます。」

10月29日 知事による現場視察③ ※ てらん広場
(知事発言一部抜粋)

- なんで部屋に閉じ込めるのか、そうやっていないとみんなが危ないからと言われてきたが、今日ここに答えがあった。
- 中井では、扉の前にうずくまっていた女性。部屋には何もない。ここでは、ハロウィンパーティーを楽しんでいた。「変えていかないといけない。」と強く思った。

11月5日 知事と障がい当事者との対話③

※ 元県障害者施策審議会委員 猿渡 達明氏
「地域の中でふれあい、自分らしく生きていくためには」をテーマに当事者と対話
(当事者の発言)

- 当事者目線ってというのは、私の中では、僕らが一緒にいることだけじゃなくて、じゃあ何を考えて、どうしていきたいのかっていうのを、ともに悩んで、ともに行動してくれるっていう人、サポートしてくれる、お互いにサポートし合い、仲間で。

11月16日 芹が谷やまゆり園開所式において知事メッセージを発信